

# 阿弥陀堂だより

——映画文学人生論

原作：南木佳士 (1995年) 「文藝春秋」	脚色：小泉堯史
監督：小泉堯史 (2002年)	撮影：上田正治
出演：上田孝夫 寺尾聡	音楽：加古隆
上田美智子 樋口可南子	幸田重長 田村高廣
おうめ婆さん 北林谷栄	幸田ヨネ 香川京子
小百合 小西眞奈美	

小説とは阿弥陀さまをことばでつくるようなものだと思います

『阿弥陀堂だより』は南木佳士の原作、小泉堯史監督の映画で、心を病んでいる人や病みそうになっっている人（私自身をふくむ）にすすめることのできる作品だと思う。

主人公の上田孝夫（寺尾聡）は、いわゆる花見百姓。桜の花ばかり見ていて田起こしもしないような百姓のことだ。花見百姓にやあ嫁に行くなと谷中村の女衆の間では言われている。

ところが、縁は異なるもの、花見百姓の孝夫の嫁になりたいという女があらわれた。高校の同級生で、女医になった美智子（樋口可南子）だ。自分にはなれないけれど、なんとなく花見百姓にあこがれちゃうな、そういう者の存在を肯定しながら生きていきたいと、嬉しいことをいう。

二人は結婚した。孝夫は小説を書いて新人賞をとったことがあるが、あとは鳴かず飛ばずの売れない作家になる。収入はほとんどないが、生活費は美智子が稼いでくれる。孝夫は食事をつくり、洗濯をし、家計簿をつけるようになった。髪結いの亭主、専業主夫、あるいはヒモのような存在だが、売れない小説を書き続けることでなんとか精神のバランスをとっている、

忙しすぎて、バランスが崩れたのは美智子のほうだ。パニック障害という原因不明の心の病にかかった。二人は花見百姓の故郷である無医村に移



## 阿弥陀堂だより

映画文学人生論

し、美智子が週三回、午前中だけ診療して暮らすことにした。医師としては落ちこぼれだが、それでも贅沢をしなければなんとか生きていける。

二人は岩魚を釣ったり、末期ガンで潔く死期を迎えようとしている孝夫の恩師（田村高廣）を見舞ったり、阿弥陀堂で暮らす九十六歳のおうめ婆さん（北林谷栄）を訪ねたりする。

ある日、二人は阿弥陀堂で小百合という若い娘（小西真奈美）と出逢った。小百合はおうめ婆さんの話を聞いて村の広報誌に「阿弥陀堂だより」を連載している。たまたま孝夫と同じ大学の文学部を卒業している後輩だったが、喉の病気で口がきけないので、筆談に頼るしかない。

「小説っていうのは嘘の話でありますか、それともほんとの話？」と。おうめ婆さんが聞いたとき、「嘘の話なんだけども、ほんとのことを伝えるための嘘の話って言ったらいいかな」と孝夫が答えると、「小説とは、阿弥陀様を言葉で作るようなものだと思います」と小百合は言った。

そのうち、小百合の病状が悪化していることが判明し、町の総合病院で手術をしなければならなくなつた。難しい手術だったが、美智子が担当医に協力して、手術は無事に成功した。すっかり自信を回復した四十三歳の美智子のお腹の中には花見百姓を父親とする新しい生命が宿つた。

嫁が来て花見百姓岩魚釣る